

## &lt;前期：キリスト教と近代的知&gt;

オリエンテーション——「キリスト教と近代的知」

1. ティリッヒと近代的知
2. マクグラスと自然神学構想
3. ティリッヒとカント1
4. ティリッヒとカント2
5. マクグラス——自然神学と真理
6. ティリッヒとフィヒテ
7. ティリッヒとヘーゲル1
8. ティリッヒとヘーゲル2
9. マクグラス——自然神学と美
10. ティリッヒとシュライアマハー
11. ティリッヒとシェリング
12. マクグラス——自然神学と善
13. まとめ

7/20

7/27

1. ティリッヒと近代的知3・4. ティリッヒとカント6. ティリッヒとフィヒテ7. ティリッヒとヘーゲル1——前期ティリッヒのヘーゲル論——8. ティリッヒとヘーゲル2——ヘーゲル論の批判的継承——10. ティリッヒとシュライアマハー11. ティリッヒとシェリング——ティリッヒの根本的問いと思想の発展史——1. 問題

1. 目的：ティリッヒの宗教思想——神学あるいは宗教哲学と限定せずに両者を包括するものとしての宗教思想——を、その中心かつ根本的な問いから理解すること。

→ ティリッヒとドイツ観念論、とくにシェリングとの関係というテーマ。

19世紀のドイツ思想史におけるシェリングの位置をめぐるティリッヒの理解

本質主義から実存主義へ

2. 「わたしの研究生生活の開始と彼の死んだ年との間には50年の隔りがあるにもかかわらず、彼はわたしの師であった。わたし自身の思想の発展において、シェリングに依存していることをわたしは決して忘れることができない」(Tillich[1955],S.392)。

これはシェリングに対する大げさな外交辞令ではない。ティリッヒの宗教思想の発展過程とその発展を突き動かしている根本的問いをシェリングとの関わりで論じることが、ティリッヒ研究の中心テーマに属している。シェリングとの関連をあつかった研究は少なからぬ数に上る。<sup>(2)</sup>

3. ティリッヒ研究の方法論について次の三つのポイントを指摘したい。<sup>(3)</sup>

(1) 批判的読解（発展史と根本的問い）

方法論の第一のポイント：ティリッヒの思想の変遷（発展史）と統一（体系性）の両面を整合的に理解し、そこからティリッヒの宗教思想の核心へ迫るという方法論的態度。  
＝ティリッヒのテキストの批判的読解。 cf. 外部視点からの一方的批判／内的視点か

(2) 思想の発展史的研究という方法論について<sup>(4)</sup> →思想の諸レベルにおける発展のずれ  
時代の衝撃と思想の転換との時差

(3) 根本的問いについて

ティリッヒの根本的な問いから、ティリッヒは誰だったのか——ティリッヒの思想をその共時的レベルで体系的に理解することを可能にしている焦点となる事柄——を解釈する。これは、ティリッヒの思想的営みの全体を一つの連関へと統合し支えていたものは何かという問題であり、例えば、ティリッヒをキリスト教の弁証家と理解することや、意味の問い（されには意味への信仰・信頼）からティリッヒの諸思想を体系的に論じることなどが、この問題圏に属している。

## 2. ティリッヒの根本的問いとシェリング

<ティリッヒのシェリング論の要点>

(1) 実存主義との関連——ヘーゲル批判の文脈——

4. シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェリングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。<sup>(5)</sup>

5. 「広義の実存の哲学」(in a larger sense)：そのもっとも典型的な思想家であるキルケゴール（狭義の実存主義）から、後期シェリング、フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェから、さらにはディルタイ、ベルグソンなどの生の哲学やウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムまでを包括する。

人間の現実や実在を本質存在から区別された「実存」（現実存在）——この実存の内容をどう理解するのか、つまり実存の基本的メルクマールを何にするかについては様々な立場が存在する——として規定し、人間存在の生きた現実を合理的に把握可能な諸本質とそれらからなる論理学の体系とから演繹することはできないとする思想的立場。

←→

論理体系において合理的に演繹される諸本質から人間を理解する立場（ヘーゲルに典型的に見られる汎論理主義）を哲学思想に広く見られる主要な思想的動向＝本質主義。

波多野ならば、合理主義。

6. 本質主義への反抗の起点として後期シェリング。

cf. 近代批判とポストモダンとの相違

「今日、実存哲学と呼ばれている特別な哲学の在り方は、ワイマール共和国下のドイツ思想の主流の一つとして現れた。その指導者にはハイデッガーやヤスパースといった人が数えられる。しかし、その歴史は少なくとも一世紀、1840年代まで遡る。その主要な論争はシェリング、キルケゴールそしてマルクスといった思想家による、ヘーゲル学派の支配的なく合理主義>あるいは汎論理主義>への鋭い批判において定式化されたのであり、次の世代では、ニーチェとディルタイがその提唱者に加わるのである」

(Tillich, 1944, p.354)。

7. こうした思想史的理解について。

①シェリング哲学の実存主義的性格は、絶対者において自己矛盾あるいは非合理的契機を認める点に端的に現れている。「<絶対我>(das absolute Ich)の原理をシェリングはフィヒテから受け継ぎ、この原理からシェリングの思索は開始されたのであるが、はじめからそれは、シェリングにとって、フィヒテにとってとは別のことを意味していた」、「フィヒテが自我は自我であるという自我の自己措定の原理から絶対者の道徳的自己実現

S. Ashina

(Selbstverwirklichung)の一元論を導き出したのに対して、シェリングは彼の初期の著作において絶対者の哲学すべてが内的矛盾を持っていることを見ていた」(Tillich,1955,S.395)。フィヒテにとって自由は絶対者の自己実現として、本質論的に捉えられており、絶対者には自己矛盾は存在しない。しかし、シェリングは自由のなかに恣意性、つまり自らの本質への離反の要素、本質的なもの (Essentiell) から実存的なもの (Existentiell) への移行の可能性を認めている。絶対者が自由な存在であるならば、それは内的矛盾を抱え込まざるを得ない。後に見る哲学学位論文でティリッヒが詳細に分析しているように、この絶対者における諸原理の内的緊張の問題は、中期以降の思索において再度思索の中心に浮上してくることになる。

②ティリッヒの捉える「広義の実存哲学」の特徴は、それに属するとされた諸思想家において確認される近代的な自己意識の明証性への懐疑あるいは批判に見ることができる。人間の意識が、無意識、階級性、力への意志など直接的には意識化されない要因によって根本的に規定されており、自己は自己自身にとって不透明であるという議論は、19世紀後半から20世紀にかけての現代思想の有力な潮流を形成している。<sup>(6)</sup>

### (2) 消極哲学と積極哲学の相補性

8. (1) で見た本質主義 (ヘーゲル) と実存哲学 (後期シェリング→キルケゴール) の関係 → シェリングの言う消極哲学と積極哲学の関係。

9. しかし、ヘーゲルとシェリングの関係は、ティリッヒによれば決して単純ではない。<sup>(7)</sup>

「ヘーゲルの死後長い間、彼はヘーゲルの最大の批判者であった。……しかし、シェリングはヘーゲルと自らが行ったこと (同一哲学) を廃棄しなかった。彼は本質の哲学を保持した。これに対して、彼は実存の哲学を対置した。実存主義はそれ自身の足で立つことのできる哲学ではない。それは常に、現実の本質構造のヴィジョンに基づいている。……この意味でそれは本質主義に基づくのであり、それなしには生きられないのである。……シェリングの後期においては、実存主義に主要な強調点が置かれていた。しかしながら、本質主義は展開されなかったものの、その前提とされていたのである」(Tillich, 1962/63, p.438)。

10. 前期の同一哲学・消極哲学から後期の哲学的経験論・積極哲学への変化 (発展) と、両者の相補性。

シェリング哲学を後期の実存論的転換 (積極哲学) へと導いた諸動機は思想の発展過程で突如現れたものではなく、思想の発展過程に一貫して内在していた、という理解である (Tillich, 1955,p.393)。

### <ティリッヒの根本的問い>

11. ティリッヒにおける多様な思想的テーマは、いかなる関連性 (体系性) にあるのか。ティリッヒにとって根本的問いとは何だったのか。

12. 仮説: ティリッヒにおいてはその長い思想発展と思索の広範な広がりにもかかわらず、根本的問いがその思想発展の最初期の段階ですでに明確に示されており、この問いが思想の発展史の全期間と多様な思想内容を根底で支えそれらに統一性を与えている。

13. 聖職叙任の第一次神学試験のために用意されたとされる「一元論的世界観と二元論的世界観との対立はキリスト教的宗教にとっていかなる意義を有しているのか」という論文(1908)における「一元論と二元論」という問題設定、あるいはまたハレ大学に提出された神学学位論文「シェリングの哲学的発展における神秘主義と罪責意識」(1912)における「神秘主義と罪責意識」という問題設定によって示された根本的問いである。<sup>(8)</sup>

(9)

14. 「神秘主義と罪責意識、絶対者との統一の感情と神との対立の意識、絶対的精神と個別的の精神の同一性の原理と聖なる主と罪深い被造物の間の矛盾の経験、これら二つのものの間のアンチノミー、これが教会の全時代にわたってこれまでの宗教的思惟がその解決のための努力を続けてきた、そしてまた今後繰り返し努力しなければならないアンチノミーなのである。」(Tillich, 1912, S.28f.)

15. 「神秘主義と罪責意識」という問題 → 神と世界の関係、あるいは神と人間の関係という、まさにキリスト教思想の中心的問い。

16. 1908年の論文の意図。

この論文は哲学的世界観とキリスト教神学あるいは信仰との積極的な関係付け（前者は後者にとっていかなる意義を有するのか）をめぐるものであり、これはティリッヒにおいて繰り返される議論（哲学と神学、存在論とキリスト教の関係など）の原型と言える。ティリッヒの宗教思想を弁証神学という観点から見ると、ティリッヒの方法論の特徴は、キリスト教思想を哲学的世界観あるいは形而上学との積極的関係において再解釈する点に認められる。なぜなら、絶対的なものの概念はキリスト教神学にとって必然的であり、キリスト教は形而上学と関わらねばならないからである。<sup>(10)</sup>

19世紀の自由主義神学において顕著な反形而上学的神学（リッチェルを含めた広義の新カント主義）へのアンチ・テーゼ(Tillich, 1908, S.28ff./98ff.)]

cf. パネンベルクのドイツ観念論に関する諸著作の問題意識。<sup>(11)</sup>

17. 1) 思想史の概観（古代ギリシャからドイツ観念論まで）

神と世界の間をめぐると議論を一元論と二元論の類型にまとめる( *ibid.*, S.34-60/102-121)。

2) 一元論と二元論の関係とそれらのキリスト教神学に対する意義を体系的に検討( *ibid.*, S.60-91/121-152)。

アウトライン

「物質的一元論→二元論的批判→精神の目的論的一元論→目的論的一元論の高次の宗教的段階」。

つまり、大きく一元論と二元論という二つの類型を設定した上で、前者は物質的あるいは自然的一元論（素朴な実在論的一元論）と精神的あるいは目的論的一元論にわけられる。そして、キリストのペルソナ理解（キリスト論）にふさわしい形へと、つまり高次の宗教的段階へと精神の目的論一元論を変革するという課題が提示されるのである（この文脈で神律概念が登場する）。

18. ティリッヒの議論のまとめ。

①中心問題あるいは根本的問い。「世界に対する神の関係についての一般的な問いは、問いの本性にしたがって、次の二つに分けられる。つまり、広義の自然に対する神の関わりと人間の人格的生に対する神の関わりである」(47/109)。一元論がすべての個別的現象を最高の原理から必然的なものとして演繹するのに対して、二元論は二つの独立した原理の根本的必然性を承認する。こうした一元論と二元論という二つの類型で展開される絶対者と世界の間をめぐると議論の問い（形而上学的問い）は、西洋の思想世界においてははじめから神思想との結びつきの中におかれていた。しかし、その場合、広義の自然と神との関わりと人間の人格性と神との関わりとのいずれに焦点を当てるかによって、議論はさらに細分化されることになる（物質的・存在論的・実在的・自然的と精神的・目的論的・歴史的）。問題は、こうした一元論と二元論という対比がキリスト教神学にとっていかなる意義を有するのかということになる。

## S. Ashina

②キリスト教の創造論（無からの創造）は、世界（の存在）の神的意志への依存と、神の世界からの分離（Geschiedenheit、神と世界との質的差異性、断絶）という二つの契機から構成されるが、まず一元論は世界が神的本性（神の永遠性）に与っていることを手掛かりとして、それとの同一性へと論を進める。それに対して二元論は世界の神的本性（永遠性）への非依存性、あるいは両者の分離や対立から、二つの根本原理の措定に向かう（例えば、神の精神性と世界の物質性との二元論や、神の善性と世界の物質性・悪との二元論など）。ティリッヒは、こうした整理に基づいて、「キリスト教的世界創造の思想は、原理的に一元論と二元論との中間に立つのではなく、二元論に反対して一元論の側に立つ」と述べる（48/110）。これがティリッヒの基本的スタンスであって、それは世界が神的実体に対立する（あるいは独立した）形而上学的実体性を有しないという主張に他ならない——ここから悪の存在をいかに説明するのかという難問がティリッヒに対しても生じることになる——。

③自然一般と人間（あるいは人格、歴史）との区別。自然一般と神との関係という問題を一元論的に論じる場合、思想史的にはまず物質的一元論と呼ばれるものが登場する。これは素朴な一元論という言い方で示唆されるように、もっとも古いわば一元論の原形であり、自然神学などはこの議論に属し、また汎神論（スピノザ）もこの系譜に入る。ティリッヒは中世思想において緻密に展開され近代へと受け継がれた自然神学、つまり物質的一元論を退ける。それは、自然神学によっては「神と世界」の関係についてのキリスト教の議論（創造論）の適切な理解に至ることはできないということを意味する（53f./114f.）。これを哲学的文脈で説明するならば、神と世界を因果関係によって結合し（この結合が一元論の特徴となる）、世界の存在から神の存在を論証する宇宙論的な神の存在論証がカントの批判哲学（カントの立場は二元論となる）によって決定的に論駁され、それによって、もはや物質的一元論は哲学的な妥当性を失ったということに他ならない。悪の存在や罪責意識に現れた神と世界との深刻な断絶や対立は、二元論が主張するように、物質的一元論では説明できない。

④しかし、二元論も神と世界の間を論じるには不適當である（57ff./118ff.）。例えば、精神的な魂の実体と身体的実体を人間の人格性における二つの独立した実在性として区別する心理的二元論は、人間の可死的部分と不死的部分の二元論を帰結する点で不適切な人間理解と言わねばならない。これは身体が十全な意味における人格性に必然的に属していることを指摘することによって克服されねばならない。この二元論の問題性は、後のティリッヒの思想においては、宗教的な超自然主義の批判として展開される。つまり、精神と自然（魂と身体）との二元論的対立を神と世界に適用するとき、自然から質的に区別される神は超自然的存在者として把握され、自然の諸連関や歴史のプロセスとは無関係にいわば世界の外に存在し、そして世界の様々な事象との関わりなしに突如世界に干渉してくるということになる。こうした神と世界の間を二元的対立で捉える超自然主義によっては、歴史において働く神との人格的関係を核心とするキリスト教信仰は表現不可能である。

⑤物質的一元論に対する二元論の批判を経て、そこからもう一つの別のタイプの一元論が生じてくる（61ff./120ff.）。ここでティリッヒの念頭にあるのはドイツ観念論であり、こうして議論はスピノザの一元論からカントの二元論を経て、シェリングの一元論へといたる。この二元論的批判に耐えうるものとして構想された一元論は、神と世界との関わりについての問題の焦点を、自然の領域から歴史・精神の領域に移すことによって成立する。つまり、自然一般から人間の人格的生への議論の転換である。実際、ドイツ観念論においては、絶対精神の展開過程としての世界史のプロセスを通じた神と人間との和解（ヘーゲル）、あるいは宗教史のプロセスにおける神と世界・人間との対立の克服（後期シェリン

グ) というように、神と世界（とくに人間）との関係は歴史という人間の行為や活動の領域に即して論じられ、二元論の強調する対立性は歴史のプロセスを通して和解に向かうと考えられている。これは歴史において働く神と救済史というキリスト教信仰の主張に対して、これまでの諸立場よりもふさわしいものと言えよう。しかし、この思想の発展史の初期の段階においてすでにティリッヒはドイツ観念論の問題性を鋭く捉えている（73f.,80f.,82ff.,89f./134f.,141ff.,144ff.,150f.）。ドイツ観念論に対するティリッヒの不满は、神と人間の問題を「にもかかわらず」という逆説性において捉える義認論的信仰、あるいはこの逆説性において捉えられる信仰の主体性と神との人格的關係を、したがって、キリストのペルソナの本質を、ドイツ観念論が適切に捉えていないという点に向けられる。これは先にヘーゲルの本質主義に対する実存主義的批判と述べた事柄にも関連している。

⑥以上のように、ティリッヒの基本的な問題意識（根本的問い）はこの初期の文献においてすでに明確に示されている。つまり、神と世界、神と人間との関係を、歴史のプロセスという人間の活動領域に定位した一元論によって捉えると共に、この一元論をキリストの人格性、逆説性、あるいは神の恩恵にふさわしく転換するという課題である——前期の言い方を借りるならば、逆説の宗教＝恩恵の宗教の問題——。この思索が神学思想として結実するのは初期の諸文献より 15 年あまり後の前期ティリッヒ（とくに一九二五年の宗教哲学とマールブルク講義）においてであり、さらに一般にそれが認知されるようになったのは初期の思想から半世紀も後の後期ティリッヒ（『組織神学』）においてである。

19. 初期の「一元論と二元論」という根本的問いは、後期にいたるまで反復される。

前期ティリッヒにおいては、この問いと答えは「意味の形而上学」に基づく神律的な宗教哲学として展開され、また後期ティリッヒにおいては、存在論的人間学（人間存在の存在論）に基づいて追求される。例えば、50年代の思惟において登場する「参与と距離の両極構造」は先に見た「一元論と二元論の統合」を後期ティリッヒの思想の枠組みにおいて表現したものであり、宗教哲学の二つの道（存在論的と宇宙論的）の統合も同様に解釈できる。<sup>(13)</sup>

### 3. ティリッヒ思想の発展史とシェリング

#### <初期ティリッヒのシェリング論><sup>(15)</sup>

ティリッヒのシェリング解釈のポイント。ポテンツ論と神論。

ティリッヒの方法論：発展史的方法(Entwicklungsgeschichte) (Tillich, 1910, S.158ff.)

このティリッヒ研究の方法論はここから来ている。

ティリッヒは、まずシェリングの思想（ポテンツと神という思想の基礎概念）の発展史の分析から議論を開始し（第一部）、次に宗教史の全体像（第二部）と宗教概念と歴史概念の解明（第三部）を試みる。それゆえ、以下のシェリングのポテンツ論と神論をめぐるティリッヒの議論の分析は、初期シェリング、中期シェリング、後期シェリングという順序で進められる。

(1) 初期シェリングの思想 (Tillich, 1910, S.160-165)

(2) 中期シェリングの思想 (Tillich, 1910, S.166ff.)

中期の『自由論』では、「意志自体の中に非合理的契機、自己自身との対立が認められる」(ibid.,S.166)。つまり、実在の基本原理としての非合理性の主張にこそ『自由論』の議論の特徴が存在するのであって、この場合、自由はこの自己矛盾の力(Macht)として理解される。それは神における三重のポテンツの議論として展開される。

①第一のポテンツ ②第二のポテンツ ③第三のポテンツ

(3) 積極哲学・後期シェリングの思想 (Tillich, 1910, S.168-172)

S. Ashina

中期シェリングにおける三重のポテンツという議論は後期においても反復される。<sup>(17)</sup>

問題とされているのは、存在するもの (das Seiende) が思惟に先立って現に存在しているということを論理の問いとしていかに分析するのかということであり、具体的にはそのために次の三重の原理が取り出される。なお、この論理構造は人間存在においても神的存在においても同型であり (『自由論』の場合と同じ)、したがって、精神的存在者であるためには、神も人間のその存在は三重のもの — 主観、客観、精神 (主観—客観) の三つのポテンツ (ibid., S.169) — として措定されねばならない。

- ① 可能的存在 (das Sein-Könnende)      ② 必然的存在 (das Sein-Müssende)  
③ 当為的存在 (das Sein-Sollende)

#### ＜シェリング論から生の次元論へ＞

ドイツ観念論における「自然と精神」というテーマ。自然の体系と精神の体系は二元論的に把握すべきではない (シェリングの自然哲学、同一哲学の基本テーゼ)

「自然は見える精神であり、精神は見えざる自然」である (I, II, 56)。精神とは「まどろみ状態」から目覚めた自然に他ならない (I, III, 453)。われわれの内なる精神と外となる自然とは絶対的に同一である。ヘーゲルにおいても、自然は因果律に規定された機械論的現象の総体ではなく、そのうちに絶対精神が顕現するプロセスが問題となる。

↓

生の次元論は後期ティリッヒにおける自然哲学に相当する。

### 4. むすびー研究の展望ー

20. 現代神学の状況。バルトやティリッヒ、ブルトマンなどの 20 世紀の指導的神学者の死後、つまり 70 年代以降、多様な神学的諸傾向へと急激に分解し、今や混沌とした状態にある。その中で、哲学や倫理の場合と同様に、伝統的なキリスト教神学へのラディカルな批判が様々な仕方で生じており、神学においてもポスト・モダンは今や一つのキー・ワードとなっている。<sup>(24)</sup>

↓

この状況下において必要な作業の一つは、近代世界においてそもそもキリスト教とその神学とはいかなるものであったのか、またポスト・モダンに対するモダンとは神学的に見て何だったのかを、正面から論じることである。この神学とモダンとの本質的関わりを理解する上で、避けて通れないのが、19 世紀の近代ドイツ神学である。

21 世紀を迎えようとしている現代の状況から、近代ドイツの神学思想を批判的に総括することが必要なのである。

21. 近代ドイツのキリスト教思想の際だった特徴の一つは、哲学と神学の動的で錯綜した影響関係の中に認められる。そこで、近代キリスト教神学とは何であったのか、という問いに答えるためには、ドイツ啓蒙思想からカントやロマン主義そしてドイツ観念論に至るドイツの古典哲学と、ルター派の信仰に依拠するキリスト教神学との相互連関について思想史的な考察を徹底的に行わねばならないことになる。これは、近代神学とは何であったのかを理解する上で不可避的かつ決定的な問いであるにもかかわらず、同時にきわめて困難な問いである。

22. 例えば、ティリッヒについて近代ドイツの古典哲学とルター派の神学という二つの思想史的前提が指摘できるが、それはより限定して言えば、シェリングとケーラーの関係と言い換えることができる。しかし、シェリングが制度的なキリスト教会を批判しつつもキリスト教神学の決定的な影響を受けていることは明らかであるし、また神学者と

して知られるケーラーもまたその思想形成の初期の時期にシェリング哲学の影響を強く受けている。<sup>(26)</sup>したがって、ティリッヒの思想的源泉をたどる場合、ここまでの哲学（シェリング）、ここからが神学（ケーラー）という仕方で、単純化して思想の影響関係を分析することは不可能である。さらに、ここにはシェリングとケーラーだけでなく、さらに多くの他の哲学者や神学者が関係しているのである。

#### 23. リサーチ・プログラムとしての「近代/ポスト近代とキリスト教」へ

近代ドイツ神学を十分な意味で研究しようとする場合、こうした思想史の錯綜した影響関係を、全体として視野にいれながら、個々の思想家の思想形成を一つ一つ解きほぐしてゆかねばならないことが明らかになる。ティリッヒ研究も以上の思想史研究の文脈に位置しており、ティリッヒとドイツ古典哲学との関係という問題設定は、いわばその一つのモデル・ケースと考えられる。これまでは、主としてシェリングとの関わりについていくつかの先駆的な研究がなされてきたが、今後は、ティリッヒとカント、フィヒテ、ヘーゲル、シェライエルマッハーといった思想家との関係も十分に視野に入れて研究を押し進め、その後にもう一度、シェリングとの関係を再考し、18～19世紀にかけてのドイツの哲学思想との、さらには20世紀のドイツの神学思想との関係を含めた思想史全体の理解に迫らねばならないであろう。→ この講義の位置！

## 文献

本論文の本文および注において略記号で引用されるティリッヒの文献は以下の通りである。なお、シェリングのテキストからの引用については、注15を参照。

EN: *Ergänzungs und Nachlaßbände zu den Gesammelte Werke*, de Gruyter 1971-

MW: *Main Works · Hauptwerke*, de Gruyter 1987-1998

1908: Welche Bedeutung hat der Gegensatz von monistischer und dualistischer Weltanschauung für die christliche Religion ?, in: EW.IX

1910: *Die religionsgeschichtliche Konstruktion in Schellings positiver Philosophie, ihre Voraussetzungen und Prinzipien*, in: EW.IX

1912: *Mystik und Schuldbewußtsein in Schellings philosophischer Entwicklung*, in: MW.1

1944: *Existential Philosophy*, in: MW.1

1955: *Schelling und die Anfänge des existentialistischen Protestes*, in: MW.1

1962/63: *Perspectives on 19th and 20th Century protestant Theology*, in: *A History of Christian Thought* (Ed. by Carl E. Braaten), Simon and Schuster 1972, pp.297-541

1963: *Systematic Theology vol.3*, The University of Chicago Press

## 注

(2) シェリングとの関わりをめぐるティリッヒ研究の状況については、次の文献を参照。

Hannelore Jahr, *Theologie als Gestaltmetaphysik*, de Gruyter 1989, S.20-26

(3) ティリッヒ研究の現状と方法論とに関しては次の拙論を参照。なお、以下の方法論は本論文にその全体が直接反映しているというよりも、本論文の論者によるティリッヒ研究の方法論とご理解いただきたい。

芦名定道 『ティリッヒと現代宗教論』（北樹出版）十八～四十八頁

(4) 本論文では次のようなティリッヒの思想発展の時代区分を念頭において考察が進められる。

初期ティリッヒ： ～一九一八（思想形成期）

前期ティリッヒ： 一九一九～一九三三



S. Ashina

- 前半： 一九一九～一九二四（体系構築 1）  
 後半： 一九二五～一九三三（移行期 1）  
 中期ティリッヒ： 一九三四～一九四五（移行期 2）  
 後期ティリッヒ： 一九四六～一九五九（体系構築 2）  
 晩年期ティリッヒ： 一九六〇～（移行期 3）
- (5) シェリングと実存主義との関係をいかに理解するかについては、研究者の間でも意見が一致しているわけではない。ビーチは後期シェリングについての次の論考の中で、ハーバーマスとシュルツのシェリング論を比較しつつ、シェリング研究における実存主義との関係をめぐる論争に触れている。
- Edward Allen Beach, *The Potencies of God (s). Schelling's Philosophy of Mythology*, State University of New York Press 1994, pp.163-176
- (6) ティリッヒのシェリング論においては、シェリングを実存主義と関連づけるだけでなく、主意主義の系譜に位置づける議論も見られる (Tillich [1962/63], p.487f.)。これは、『カイスロとロゴス』 (Kairos und Logos, in: MW.1269-272) において、西欧精神史の主流 (Hauptlinie) — 方法論の流れ、神秘的な形而上学の流れ、数学的プラトン 主義の流れ、イギリス経験論の流れ — に対する傍流 (Nebenlinie) と呼ばれた思想系譜である (中世末期やルネサンスの神秘主義・自然哲学→スコトゥス、ルター→ヤコブ・バーメ→ロマン主義→シェリング→生の哲学)。これは、ティリッヒが理解するシェリングの思想史的位置づけであるのみならず、ティリッヒを現代思想の文脈で論じる際にも、重要な論点であるように思われる。
- (7) この点については、次の拙論「前期ティリッヒとヘーゲル」(組織神学研究所編『パウロ・ティリッヒ研究』聖学院出版会 所収) 一八八～一九一頁を参照。
- (8) 一九〇八年のテキストの成立事情に関しては、ドイツ語全集版補遺稿集第九巻の編集者による解説 (EW.IX, S.20-23) を参照。なお、このテキストからの引用は、この補遺稿集に収められた初稿版 (S.24-93) と清書版 (S.94-153) の双方の頁を併記することによって行うこととする。また、このテキストについてのまとまった研究書としては次の文献が存在する。
- Anton Bernet-Strahm, *Die Vermittlung des Christlichen. Eine Theologiegeschichtliche Untersuchung zu Paul Tillichs Anfängen des Theologischer und seiner Christologischen Auseinandersetzung mit Philosophischen Einsichten des Deutschen Idealismus*, Peter Lang 1982
- (9) 副説教師時代のティリッヒの思想的関心については次の研究書を参照。
- Wilhelm & Marion Pauck, *Paul Tillich. His Life & Thought. Volume 1: Life*, Harper & Row 1976, pp.30-39
- Werner Scüßler, *Die Jahre bis zur Habilitation (1886-1916)*, in: R. Albrecht / W. Scüßler, *Paul Tillich. Sein Werk*, Patmos 1986, S.18ff.
- (10) ティリッヒの後期の思想において、この問題は神学における存在概念の必要性あるいは存在論と神学との関係性という観点から繰り返し論じられる。
- Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality* 1955, in: MW.4  
*Systematic Theology. Volume II*, The University of Chicago Press 1957, pp.10-12
- (11) この点については、パネンベルクの次の論文の諸論などを参照。
- Wolfhart Pannenberg, *Metaphysik und Gottesgedanke*, Vandenhoeck 1988
- (12) このプログラムが組織神学において具体化された最初の記録として、一九一三年の「組織神学草稿」を挙げることができる。「思惟、体系、概念、絶対的宗教、神秘主義」(絶

対的立場)と「反省、懐疑」(相対的立場)の対立を克服する「逆説—義認—キリスト」という図式は、まさにここで見た一九〇八年のプログラムにきれいに対応している。

Systematische Theologie von 1913, in: EW.IX, S.278-434

(13) 参与と距離、宗教哲学の二つの道については次の文献を参照。

Participation and Knowledge. Problems of an Ontology of Cognition 1955, in: MW.1

The Two Types of Philosophy of Religion 1946, in: MW.4

(14) この哲学学位論文の成立事情については、パウクやシュッターの伝記的研究(注9参照)の他に、ドイツ語全集版補遺稿集第九巻の編集者による解説も参照(EW.IX, S.154f.)。また、この学位論文の構想は次の未刊行テキストからも知ることができる。

Gott und das Absolute bei Schelling, in: *Religion, Kultur, Gesellschaft. Erster Teil*, 1999

(EW. X/1), S.9-54

(15) ティリッヒによるシェリングからの引用は次の版によって行われている。

F.W.J.Schelling, *Sämtliche Werke* (Hrsg.v. K.F.A.Schelling). Erste Abtheilung, 1856-1861, Zweite Abtheilung, 1856-1858, Stuttgart / Augsburg

シェリングからの引用は、Abtheilung, Band, Seite の順で、I.I.395 などと表記する。

#### <最近の日本におけるシェリング研究(ティリッヒのシェリング論と関係するもの)>

日本シェリング協会『シェリング年報』晃洋書房。

『シェリング著作集』(全5巻、全7冊) 燈影舎。

橋本 崇『偶然性と神話 後期シェリングの現実性の形而上学』東海大学出版会、1998年。

諸岡道比古『人間における悪 カントシェリングをめぐる』東北大学出版会、2001年。

松山寿一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房、2004年。

松山寿一『人間と悪 処女作『悪の起源論』を読む』2004年、『人間と自然 シェリング自然哲学を理解するために』2004年、『知と無知 ヘーゲル、シェリング、西田』萌書房、2006年。

平尾昌宏『哲学するための哲学入門 シェリング『自由論』を読む』萌書房、2010年。

H. J. ザントキューラー『シェリング哲学 入門と研究の手引き』昭和堂、2006年。

(16) 中期の『自由論』における自由は自己自身との矛盾する力・ポテンツであり、この点では、非合理的なものこそがもっとも卓越した意味におけるポテンツである。したがって、この意味における最高のポテンツは第一のポテンツに属することになる。しかし、初期前期における発展の諸段階という意味では、この第一のポテンツは最下位に位置するのであって、ここにポテンツ概念の展開が見られる。

(17) ティリッヒによれば、同じ三重のポテンツの議論でも、中期と後期においては、明かな相違が見られる。つまり、『自由論』では、神の精神性がいわば世界過程に組み込まれているのに対して、積極哲学では、神の精神性が世界過程の思想とは独立に議論される(内在的三位一体論の強化!)。世界過程の展開に先立って、神の内なる永遠の生成の概念において生じる質的な時間概念がシェリングの後期の体系には存在しており、これを基礎として神の自由が理解されるのである。「神が精神であり、人格性であることは現実の世界過程を通して始めてそうなのではなく、未来の過程の諸ポテンツを通して既にそうなのである」([1910], S.177)

(18) 後期シェリングの思想的課題について、ティリッヒは次のように論じている(ibid., 168f.)。存在するもの(das Seiende)はもっとも根源的で包括的かつ必然的な理性(思惟)の内容であるが、それは対象一般の概念からは演繹されない(=経験論、事実主義。思

S. Ashina

惟に先立つ「もの」が「ある」という事実)。しかし、思惟（合理的哲学）は存在の無限のポテンツの内に互いに継起する諸ポテンツの内的組織 (eine inneren Organismus aufeinanderfolgender Potenzen) の発見を目指すのであって、この継起する諸ポテンツの内的組織（主観・客観・精神）とは理性の内的組織に他ならない。すなわち、「この組織を顕わにすることが合理的哲学の事柄」(2,III,76)であり、この手段が知的直観と呼ばれる純粋な思惟経験(Denkerfahrung)に他ならない。こうした哲学的経験論と合理的分析との統合はきわめて困難な課題であり、ここに後期シェリングの難解さの一因がある。これは体系的思想の提示という点ではいわば破綻を予感させるものとも言えるかもしれない。

(19) 神について象徴によってアナログ的に語る際の限界は、ティリッヒが繰り返し指摘する問題であるが、自由と運命に関しては、次のテキストを参照。

*Systematic Theology vol.1, The Univ. of Chicago Press 1951, pp.248-249*

(20) 哲学学位論文では後期シェリングにおける宗教史（神の人格化・ポテンツ間の調和の回復を通した神と人間との和解のプロセス）の問題を再構成することが試みられるが、それは次のような世界過程の見取り図に組み込まれた上で、重層的な三一構造をなすものとして示される(Tillich[1910], S.185-231)。

<世界過程の見取り図>

神→

世界過程

→自然過程・理念世界の創造

墮落

→歴史過程＝宗教史（神話過程・合理的過程

→啓示<ユダヤ教・キリスト・教会>）

消極哲学



積極哲学

<宗教史における神話過程>

Erste Epoche: Relativ vorgeschichtliche Zeit (Uranos)

Zweite Epoche: Perser, Babylonier, Ababer (Urania)

Dritte Epoche: a) Erste Periode: Kanaanäer und Phönizier (Kronos)

b) Zweite Periode: Phrygier und Thrakier (Kybele)

c) Dritte Periode α) Ägypter: Typhon, Osiris, Horos

β) Indier: Brama, Schiwa, Wischnu

γ) Griechen: Hades, Poseidon, Zeus

(21) シェリングの自然哲学についての初期ティリッヒの分析としては、[1912],S.49-56 に詳しい議論が見られる。

(22) ティリッヒの生の次元論については次の拙論を参照。

芦名定道「ティリッヒの生の次元論とその諸問題」(『ティリッヒ研究』創刊号 二〇〇〇年 現代キリスト教思想研究会)

(23) 生の次元論の形成過程を理解するには次の論文が重要である。

Dimensions, Levels, and the Unity of Life 1959, in: MW.6

The Meaning of Health 1961,in:Paul Tillich, *The Meaning of Health. Essays in*

*Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, Exploration Press 1984, pp.165-173

(24) この点については次の拙論を参照いただきたい。

芦名定道「キリスト教と近代自然科学—ニュートンとニュートン主義を中心に—」(『京都大学文学部研究紀要』第三十八 京都大学文学部) 一四八～一五八頁

(25) 近代ドイツ神学のキリスト教思想史における意義については、次のパネンベルクの議論を参照。

Wolfhart Pannenberg, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*,  
Vandenhoeck & Ruprecht 1997, S.17-24

(26) ケーラーとシェリングとの関わりについては次の文献を参照。

Hans-Georg Link, *Geschichte Jesu und Bild Christi. Die Entwicklung der Christologie Martin Käblers*, Neukirchener Verlag 1975, S.27-77